

コンゴ伝道に見る異文化接触 (47)

おやさと研究所准教授

森 洋明 Yomei Mori

「私の息子はきつとこの光景を長く記憶に留めることでしよう。」と綴られたバゼビバカ氏（現コンゴブラザビル教会長）の手記からは、身近に迫ってきた危険や悲惨な避難生活だけでなく、殺気だった兵士たちや戦闘の犠牲者の生々しい様子などもうかがうことができる。

ブラザビルに無事たどり着いたバゼビバカ氏は、正規軍に先導されて首都北部に落ち着いた。市内に入ってから離れ離れになっていた妻と娘ともそこで再会した。1999年1月1日午後5時のことだった。その日の午前1時に森を出発してから、反政府ゲリラに見つからぬように闇の中を進み、政府軍の検問所では敵と見なされる危険を常に伴いながらずっと歩き通したので、心身の疲れも相当だった。

ようやくたどり着いた避難所には、下痢症状の人たちが数多くいたので、バゼビバカ氏は幼い子どもたちのことを考え、北部にいる友人の家に身を寄せることにした。当時、首都の北部では教会周辺地域のバコンゴやマケレケレと違い、全てが正常に機能していた。つまり今回の戦闘はこれまでの2度の戦争のように、首都の中心部自体が敵味方分かれたものでなく、教会周辺地域とそこから西部に広がるプール県に限られたものだった。南部では、家を失い、戦闘を逃れた多くの人たちが、人質となって森から出られない状態がまだ続いていた。将来に対する不安も大きく、手記には次のように記されていた。

苦しみはこれで終わったのではありません。どんな将来が我々を待ち受けているのか。ただ親神様のご守護だけが支えです。戦争が終わったとしても、全てを失ってしまった今、どうやって生活を立て直せばよいのか。これらのことを考えると不安が募るばかりです。今は極力考えないようにしています。ついこの前はキンシャサに逃げることも考えました。プール地方出身者、反乱軍に与する者をターゲットにした殺人、誘拐、人種浄化が行われると言う噂が広がったのです。しかし政府がこうした人種差別的な行動や、略奪、蛮行に断固とした姿勢をとったため、胸を撫で下ろすことができました。しかしこのような蛮行を行う者たちから武器が取り上げられるまで、安心はできません。

実際、略奪だけでなくさまざまな蛮行が、武器を持たない一般市民の避難者たちに対して行われていたという証言も少なくない。別のルートで避難生活を送った教会の信者から聞いた話の中には、ゲリラに捕らわれて人質となった人々に対する悪逆無道な振る舞いを物語るものもあった。子どもをかばって殺された母親、自分の息子くらいの少年兵に「笑え」と命令され必死で笑いながらも最後には頭を銃弾で撃ち抜かれた男性、婦女に対する暴行も数多く、またその中には血の繋がった姉弟に性的関係を強要するような非道もあったという。そしてこうした蛮行の多くが大勢の人前で繰り広げられたのだった。

この戦闘の大義名分は、クーデターで政権を追われた側が政権奪回を目指して、首都に進軍したのだった。しかし実際は、反政府軍はゲリラと化し、戦況が劣勢になると、自分たちの同族でありかつては支持者でもあった南部の住民たちに対し、蛮行を繰り返し、私利私欲の限りを尽くしただけだった。一番の

被害者は言うまでもなく一般市民である。政府軍の圧倒的戦闘力に屈した反政府ゲリラは、その後数年間プール県の森の中に潜み、生活のために列車内での略奪行為や旅行者へのゆすりやたかりを行っていた。彼らが潜んでいた一帯の森は、ゲリラの首領として君臨したFrédéric Ntumi Bintsamuが政府の一員として招かれる2010年頃まで、治安部隊の手が届かない不法地帯となっていた。

首都北部に落ち着いたバゼビバカ氏は、一刻も早く教会へ戻ろうと考えていたが、その後もしばらく教会周辺地域では戦闘が続き、避難者たちは自分たちの地区へ戻ることが許可されなかった。

1月18日以降ずっと、バコンゴ、マケレケレ地域への帰宅許可が出るのを待っていますが、反乱軍の攻撃で戦闘が激しくなり、望みは叶えられそうもありません。立ち入り禁止が続いています。教会には一度戻っただけです。この間に教会はどうなってしまうのか。戦闘は略奪行為を助長し、爆撃による破壊も続きます。ブラザビル北部に参拝所が無いのが悔やまれます。各人がそれぞれにおつとめをしています。プール地方やドリジーの戦闘はいつ終わるかわかりません。

その後4月には、武力衝突がなくなり、国際赤十字などによって路上に放置されていた犠牲者の遺体の収容が開始された。地域一帯の殺菌消毒も終了し、5月になってようやく、教会の周辺地域に住民が戻る許可がでた。しかし、多くの住人がまだ戻っていない中で安全面も危惧され、しばらくは教会に通うことによって活動復興の準備にとりかかった。

内戦以降、会長が不在でありながらも教会の復興の歩みがいち早く始まったのは、何としてでも教会活動が再開できるようにという、親からの信仰を受け継いだ人たちがいたからだった。境内に散乱したおつとめ着や教服、鼓笛隊のユニフォームなどを拾い集めて洗濯をするところから始まった。

1999年の9月、周辺の状態が落ち着き始めたという一報を受けて、教会本部から高橋利行ヨーロッパ・アフリカ課長（当時）と私が、コンゴブラザビル教会を訪問した。教会の壁のあちらこちらに弾痕が残っていた。日本人教職舎内の壁にも、略奪者が付けたと思われる手形や足形が残っていた。教会では、戦闘で住居を失い、帰る家のない人たち15世帯約80名が避難生活を続けていた。天理よろづ相談所病院や海外部から寄贈された物資（マットや蚊帳）を贈呈した。滞在中には9月の月次祭が勤められた。教会に関する祭具は無事だったようだ。参拝場には座るところがないくらい人で溢れ、復興の力強さが感じられた。ただ、南部の村々では、まだゲリラが活動を続けていて、そのために森から抜け出せない人たちも相当数いたという。また、首都においても人の移動には制限がかけられており、ポトポトジュエ布教所があるサンゴロ地区へは、許可なしでは行けなかった。

この後、教会には隣国のキンシャサに避難していた人たちも戻ってきて、少しずつ活動を再開させていくことになる。こうして、90年代に3回に及ぶ大きな内戦という大節を乗り越え、コンゴ伝道は新たな時代に入っていくのであった。